

## (2) 調査遺跡の概要

### やまがたじょうさん まる 山形城三の丸跡 (第10次)

遺跡番号	201-003
調査回数	第10次
所在地	山形市十日町
北緯・東経	北緯 38 度 14 分 54 秒・東経 140 度 20 分 6 秒
調査委託者	山形県子育て推進部子ども家庭課
起 因 事 業	山形県保健福祉センター東棟 (仮称) 新築工事業
調査面積	816 m <sup>2</sup>
受託期間	平成 24 年 4 月 27 日～平成 24 年 3 月 31 日
現地調査	平成 24 年 5 月 14 日～7 月 27 日
調査担当者	天本昌希 (現場責任者)・齋藤和機
調査協力	山形県県土整備部建築住宅課営繕室、山形県村山総合支庁保健福祉環境部村山保健所保健企画課
遺跡種別	城館跡
時 代	近世・近現代
遺 構	堀、井戸
遺 物	陶磁器・土器・土製品・瓦・木製品・金属器・石製品 (文化財認定箱数: 70 箱)



遺跡位置図 (1 : 50,000)

#### 調査の概要

山形城跡は、現在、国史跡となっている本丸・二の丸と、その周辺を取り囲む三の丸を含め、東西 1,617 m、南北 1,553 m の範囲が遺跡として登録されている。三の丸は現在の山形市街地の中心地にあたり、道路の拡幅等多くの開発事業が行われている。埋蔵文化財センター

では、受託した山形城三の丸跡発掘調査の調査回数を、年度ごと、調査原因となった事業別に順次振り分けており、今回の調査で第 10 次を数える。

第 10 次調査は、2012 年度の山形県子育て推進部子ども家庭課による保健福祉センター東棟 (仮称) の建設に伴う発掘調査である。山形市十日町一丁目の現村山保健所の敷地内において、2012 年 5 月 14 日より開始し、同年 7 月 27 日まで実施した。調査面積は、816 m<sup>2</sup>で、SD1 と SE2 の 2 つの遺構を検出した。

#### 検出遺構

SD1 は、調査区東側を縦断する山形城三の丸の東堀跡である。検出できた範囲は、長さ 30 m、幅は上端で 12 m、軸は南北、東 25 度の方向に走る。壁面は西側のみを検出し、東側は立ち上がりを確認できないまま調査区外へ伸びる。深さは最深部で現地表面から 5.3 m、確認面から 4 m を測る。底面から西壁面は、35 ~ 40 度の斜度で立ち上がり、そのまま土壁につながっていたものと推測される。護岸のためか、西壁面に木杭列が確

認できた。底面の幅は、検出できたもので3.6m程度あり、堀全体の断面形状は、逆台形の箱堀になる。堀底面および壁面には、20～50cm大の川原石が不規則ながらも一定の密度をもって面的に存在しており、この上面をもって床面、壁面とした。

覆土は、全体的に黒褐色を基調とし、色調や土質、含有物などから1層～10層に細分し、遺物の取り上げは、上層、中層、下層、最下層の4つに大別した。1層＝上層は、粘土質のシルト層で、堀の埋め立てにより堆積した層と考えられる。攪乱の影響を大きく受け、境界が曖昧なところも多い。一部に円礫が多数出土しているが、攪乱によるものと思われる。2～4層＝中層は、砂質層で粗粒砂層と細粒砂層が互層状に堆積しており、洪水などによる堆積がうかがえる。5層～8層＝下層は、火災による廃材を廃棄した層と考えられ、大量の木製品のほか、焼けた樹木なども出土している。9、10層＝最下層は、粘土質のシルト層に灰白粘土層が何層にも薄く堆積し縞状になっている。水成堆積によるものと考えられ、滞水と乾燥を繰り返しながら少しずつ堆積していったことがうかがえる。調査区全体を見ても、この土層中の縞模様が途中で崩れることがないため、溝浚えなどの掘り直しは行われていないと判断できる。

SE2は、SD1に重複する石組の井戸跡で、SD1が埋没した後につくられている。堀の覆土中で立ち上がるもので、飲用水としていたかは別として、女子師範学校及びその附属施設で用いられたものだろう。

#### 出土遺物

上層からの出土遺物は、磁器をみると、瀬戸美濃系のものが大部分を占め、在地の磁器も相当数含まれると思われる。端反碗や小皿が多く、同一の器形、文様のものが多数出土している。他にも薄手酒盃や爛徳利、急須などが多く出土する。陶器は大堀相馬の三彩土瓶や断面T字形になる鉄釉掛け流しの中甕、笹絵徳利などが出土している。大量の遺物は、不要品の廃棄によるものと考えられ、三の丸堀の埋戻しに伴うものと判断できよう。出土遺物には平清水のインク瓶など20世紀以降の遺物も少なからず出土している。堀の埋立て後の土地利用により紛れ込んだものとも解釈できようが、相当量混在していることから、堀跡は、埋戻し後も窪地としてのこっていた可能性も指摘できる。

その下に堆積する中層の出土遺物量は、上層に比べると遺物量は大きく減るものの、木製品が出土するようになり、磁器は肥前系のものが増えるようになる。

下層の出土遺物は、磁器製品をみると、肥前系のものが大勢を占め、瀬戸美濃系のもは客体的となる。碗の器形は丸形碗や半筒碗、半球碗、広東碗などと様々なものが見られる。陶器は大堀相馬の丸碗や京・信楽の杉形碗、唐津の皿などが、木製品は漆器碗や下駄などが数多く出土している。また、火事で焼けたと思われる大量の炭化材の中には、いくつかの荷札も含まれており、城下の商店の屋号や人名などが記されている。

最下層から出土した遺物は、多くはないものの、初期伊万里の磁器の丸碗や皿、唐津の溝縁皿などがまとめて出土している。また、床面とした川原石を可能な限り外し、三の丸堀の構築年に接近する遺物を探したが、出土したのは、陶器の胴部片1点のみであった。

なお、出土遺物の中に近世以前のものは、1点も確認できなかった。調査区は、隣接する東側の敷地に比べ、1m以上の段差をもって低くなっており、土地造成時に深度の浅い遺構ごと削平されている可能性がある。

#### まとめ

今回の調査は、三の丸堀跡の調査として最大規模のものであり、これまでの調査成果と合わせて、より具体的な三の丸堀の形状や規模を復元することが可能となった。また、火災廃棄層とした下層の出土遺物は、城下に暮らす人々の生活を物語る重要な資料といえる。この層の形成要因となった火災の年代を示す資料として、「明和九年…」と墨書された建材や、「明和5年…」と刻まれた硯が出土していることから、18世紀末を上限とすることができる。調査区周辺での火災記録は、1819(文政2)年の大火をはじめ、19世紀前半に数多く残されているが、近隣の調査区でこの火災層は検出されていないため、記録に残らないような小さな火事によるものという可能性もあるだろう。

近・現代遺跡は、各地で調査事例が増し、蓄積が進むにつれ、歴史資料としての価値が高まっている。山形城三の丸跡は、近世城郭としてだけでなく、山形の近代化を語る上で欠かすことのできない重要な資料である。今後の調査成果に期待したい。



写真1 SD1 完掘状況 (北から)



写真2 SD1 断面 (北から)



写真3 SD1完掘状況近景(北から)



写真4 中層調査状況(東から)



写真5 下層火災廃棄層検出状況(西から)



写真6 調査風景(南から)



写真7 上層出土遺物集合



写真8 下層出土遺物集合



写真9 最下層出土遺物集合



写真10 出土木筒集合